

無アクセント地域における 親と子のアクセント

堀 口 純 子

I. は じ め に

言語形成期を過ごす地域（以下、言語形成地という）のアクセントと親¹⁾のアクセントは、子供の習得するアクセントにどのような影響を及ぼすか。言語形成地と親のアクセントをそれぞれ、有型アクセントと無アクセントに分けると、次の4つの場合が考えられる。

- ① 言語形成地も親も有型アクセント
- ② 言語形成地は有型アクセントで、親は無アクセント
- ③ 言語形成地は無アクセントで、親は有型アクセント
- ④ 言語形成地も親も無アクセント

このことを表にすると、表1のようになる。

表 1. 言語形成地のアクセントと親のアクセントの組み合わせ

言語形成地の アクセント	有型アクセント	無アクセント
親のアクセント		
有型アクセント	①	③
無アクセント	②	④

親が言語形成期を過ごした地から他の地へ移住し、そこで子供が言語形成期を過ごした場合、その地のアクセントと親のアクセントが子供の習得するアクセントにどのように影響するかについては平山輝男氏によって明らかにされている²⁾。移住した地が有型アクセント地域の場合、親が無アクセントであるか

1) 親とは、両親、父親だけ、母親だけのいずれの場合も意味する。

2) 平山輝男「移住者二世の言語一特に無アクセント地域の場合」『国語学』114, 昭和53年。

有型アクセントであるかということにも、また親が有型である場合のアクセントの種類（東京式、京阪式など）にもあまり支配されず、移住地のアクセントを十分習得するということが20の具体例によって確認されている。これに対して移住地が無アクセント地域の場合親が有型アクセントの所有者であれば、子供は移住地の無アクセントの影響はあまり受けずに親の有型アクセントの影響を多く受けるということが13の具体例によって明らかにされている。これらの具体例から明らかにされたことを表示すると、表2のようになる。

表2. 移住者二世が影響を受けるアクセント

移住地の アクセント	有型アクセント	無アクセント
親のアクセント		
有型アクセント	移住地のアクセント	親のアクセント
無アクセント	移住地のアクセント	

平山氏の例は、親が言語形成期を過ごした地から他の地に移住して、移住地で子供が言語形成期を過ごした場合についてである。ここで移住地といっているのは親の側からの見方であって、子供にとってはこの地は生育地であり、言語形成地である。そこで表2の移住地を子供の言語形成地と考えれば、表1に表2をあてはめることができ、表3のようになる。すなわち、言語形成地が有型アクセントの場合、親が有型アクセントであるか無アクセントであるかにかかわらず、子供は言語形成地の有型アクセントを習得する。言語形成地が無アクセントの場合、親が有型アクセントであれば子供の習得するアクセントは親のアクセントの影響を多く受ける。それでは親が無アクセントであれば子供のアクセントはどのようなになるのか。

表3. 子供のアクセント習得に影響を与えるアクセント

言語形成地の アクセント	有型アクセント	無アクセント
親のアクセント		
有型アクセント	言語形成地のアクセント	親のアクセント
無アクセント	言語形成地のアクセント	

理論的に考えれば、言語形成地も親も無アクセントの環境では有型アクセントを耳にする機会が少ないため、子供も無アクセントになると予想されるが、

実際はどうであろうか。もし子供も無アクセントである場合、父と母と子はそれぞれ発話のたびに任意のアクセントで発音しているのであろうか。それとも、無アクセントといっても一定の型がないのであって、アクセントはあるのであるから、親と子の間には何らかの共通点があるのであろうか。

このような点に注目して、茨城県新治郡桜村の農村地区で、中学生とその両親にアクセント調査を実施した。本稿では、父と母と子という一家族を単位とした場合、および両親の世代と子供の世代という同一世代を単位とした場合の2点から考察を進めていく。

II. 調査について

1. 調査時期

昭和55年10月～11月

2. 調査地点

- ① 中学生一桜村立桜中学校（桜村金田）
- ② 両親一桜村栗原、桜村上野、桜村柴崎、桜村中根、桜村東岡、桜村花



図1 茨城県概略図



図2 桜村概略図

室、桜村古来、桜村上の室、桜村吉瀬

桜村は茨城県南部に位置し(図1)、昭和40年代前半までは純農村としての道を歩んできた。しかし、筑波研究学園都市の建設により、現在は既存の農村地区と研究学園地区とに二分され、在来住民はほとんど農村地区に住み、研究機関の移転により東京およびその周辺から移住してきた住民は主に学園地区に住んでいる。上記の調査地点はすべて農村地区にある(図2)。

桜村の中学校は現在3校で、農村地区に1校、学園地区に2校ある。桜中学校は農村地区にあり、昭和32年に開校した桜村で一番古い中学校である。

本校の生徒のアクセントの傾向をつかむため、2年生全員の現在までの居住歴をまとめると、表4・表5のようになる。桜村で生まれ育った者は105人の

表4. 桜中学2年生の居住歴

生育地	桜村	桜村以外の茨城県→桜村	桜村以外の茨城県→県外→桜村	県外→桜村	合計
人数	73人(69.5%)	13(12.4%)	2(1.9%)	17(16.2%)	105(100%)

表5. 桜村に何年住んでいるか

年数	13~14年	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
人数	73人	1	2	5	1	6	6	3	3	3	2
合計		82					23				

うち73人で、全体の69.5%を占めている。あとの32人は、17人が県外出身者で、15人が県内の桜村以外の出身者である。桜村の居住年数が6年以下の者、すなわち言語形成期の初期または初期から中期を桜村以外の地で過ごした

表6. 桜村の前の居住地

居住地	茨城県			千葉県	埼玉県	東京都		
	土浦市	筑波郡	石岡市	柏市	所沢市	台東区	墨田区	江戸川区
人数	8人	2	1	1	1	1	1	1
居住地	神奈川県			群馬県	福岡県	北海道		
	横浜市	川崎市	茅ヶ崎市		田川郡			
人数	2	1	1	1	1	1		

23人についてその居住地を調べると表6のようになる。表5と表6から、82人が桜村で、11人が桜村以外の茨城県で言語形成期を過ごしたといえる。このことから、93人すなわち桜中学校2年生の88.6%は茨城アクセントと考えられる。

3. 調査対象

① 桜中学校2年生105人の中から、桜村で生まれ育ち、両親も桜村またはその周辺の出身で現在農業に従事している者20人(男10人、女10人)を選んだ。

② 上記20人の中学生の両親のうち、協力が得られた父親13人と母親15人表7に父親と母親の年令、母親の出身地、桜村の居住年数を示す。父親13人は全員出身地は桜村で、居住年数は年令と同じであるので省略する。母親も15人のうち9人が桜村出身で、4人が筑波郡、2人が土浦市である。筑波郡も土浦市も桜村に隣接している。

表7. 両親の年令・出身地・桜村居住年数

家族略称	父	母		
	年令=桜村居住年数	年令	出身地	桜村居住年数
A	52	47	桜村	47
B	47	47	桜村	47
C	45	44	桜村	44
D	43	37	桜村	37
E	41	40	桜村	40
F	39	38	桜村	38
G	38	40	桜村	40
H	38	37	桜村	37
I	46	46	土浦市	23
J	44	44	筑波郡	17
K	40	38	筑波郡	15
L	39	36	筑波郡	15
M	43	38	土浦市	14
N	45で死亡	36	桜村	36
O		46	筑波郡	19

4. 調査方法・項目

① アンケート調査

中学生 105 人には、居住歴のほかに両親の職業、職場の所在地、買物をする場所を記入してもらった。

② 読む調査

漢字・かなまじりで書いた単語・句・文を読んでもらって録音した。項目は名詞 33 語、動詞 18 語、形容詞 20 語で、形は名詞の場合は単独、名詞句、文頭（風、涼しい風、風が吹く）の 3 種類、動詞の場合は単独の現在形・過去形、文末の現在形・過去形（飲み込む、飲み込んだ、花が咲く、花が咲いた）の 4 種類、形容詞の場合は単独の現在形・過去形、連体形、文末の現在形、「～くなる」形（赤い、赤かった、赤い花、花が赤い、赤くなる）の 5 種類である。なお、本稿では名詞について検討する。

III. 各家族におけるアクセントの一致

1. 父母子のアクセントの一致

父母子 3 人の資料がそろっている A～M の 13 家族について、1 家族を単位として父母子 3 人のアクセントの比較をする。同一語の発音で父母子 3 人の音相が一致している語数およびその割合（一致率）を名詞の拍数によってまとめたのが表 8、名詞の起こる環境によってまとめたのが表 9 である。また、有型アクセント地域と比較するため、東京の資料を表の一番下につけ加えた³⁾。

父母子 3 人のアクセントの一致率の平均は 23.6% で、一番低いのは K の 16.4%、一番高いのも M の 35.8% である。これは東京の父母子の一致率に比べるとかなり低い。A～H の 8 家族は、父母子 3 人とも桜村の出身であり、他の 5 家族も、父と子は桜村出身で、母も桜村の近くで生まれ桜村在住 14 年以上である。それにもかかわらず、一致率の低い家族では調査語の 4/5 以上の語を、一致率の高い家族でも約 2/3 の語を、同一家族の中で 1 語につき少なくとも 2 種以上のアクセントで発音しているわけである。これは、父母子の言語

³⁾ 東京都江東区深川と東京都調布市における調査をもとに、両親は東京アクセントの一般的な型を所有していると仮定し、中学生のアクセントが新しい型であった場合はすべて、両親と子供は不一致として計算した。したがって、表の数値は最低の一致率で、実際にはこれより高いと予想される。

表 8. 父母子のアクセントの一致

拍数 家族略称	2拍 (32語)	3拍 (22語)	4拍 (13語)	合計 (67語)
A	9語 (28.1%)	6語 (27.3%)	4語 (30.8%)	19語 (28.4%)
B	6 (18.8)	7 (31.8)	3 (23.1)	16 (23.9)
C	6 (18.8)	2 (9.1)	5 (38.5)	13 (19.4)
D	8 (25.0)	3 (13.6)	3 (23.1)	14 (20.9)
E	10 (31.3)	4 (18.2)	3 (23.1)	17 (25.4)
F	5 (15.6)	9 (40.9)	3 (23.1)	17 (25.4)
G	8 (25.0)	4 (18.2)	2 (15.4)	14 (20.9)
H	6 (18.8)	5 (22.7)	1 (7.7)	12 (17.9)
I	8 (25.0)	5 (22.7)	2 (15.4)	15 (22.4)
J	12 (37.5)	3 (13.6)	1 (7.7)	16 (23.9)
K	3 (9.4)	4 (18.2)	4 (30.8)	11 (16.4)
L	8 (25.0)	6 (27.3)	4 (30.8)	18 (26.9)
M	13 (40.6)	8 (36.4)	3 (23.1)	24 (35.8)
平均	7.8語 (24.5%)	5.1語 (23.1%)	2.9語 (22.5%)	15.8語 (23.6%)
東京	32 (100)	8 (36.4)	5 (38.5)	45 (67.2)

表 9. 父母子のアクセントの一致

環境 家族略称	名詞単独 (17語)	形容詞+名詞 (17語)	名詞+助詞… (33語)	合計 (67語)
A	2語 (11.8%)	7語 (41.2%)	10語 (30.3%)	19語 (28.4%)
B	1 (5.9)	5 (29.4)	10 (30.3)	16 (23.9)
C	4 (23.5)	3 (17.6)	6 (18.2)	13 (19.4)
D	4 (23.5)	3 (17.6)	7 (21.2)	14 (20.9)
E	4 (23.5)	4 (23.5)	9 (27.3)	17 (25.4)
F	1 (5.9)	5 (29.4)	11 (33.3)	17 (25.4)
G	0 (0)	7 (41.2)	7 (21.2)	14 (20.9)
H	3 (17.6)	3 (17.6)	6 (18.2)	12 (17.9)
I	3 (17.6)	3 (17.6)	9 (27.3)	15 (22.4)
J	2 (11.8)	3 (17.6)	11 (33.3)	16 (23.9)
K	9 (52.9)	1 (5.9)	1 (3.0)	11 (16.4)
L	6 (35.3)	3 (17.6)	9 (27.3)	18 (26.9)
M	6 (35.3)	7 (41.2)	11 (33.3)	24 (35.8)
平均	3.5語 (20.4%)	4.2語 (24.4%)	8.2語 (24.9%)	15.8語 (23.6%)
東京	7 (41.2)	16 (94.1)	22 (66.7)	45 (67.2)

形成地が同一の有型アクセント地域である場合には見られない現象であり、無アクセント地域の一つの特徴といえよう。

Gの家族では、名詞を単独に発音した場合には3人のアクセントが一致する語が1語もないが、形容詞に修飾された場合には7語で3人のアクセントが一致し、一致率41.2%で13家族の中で一番高い。Fの家族では、名詞単独の場合に3人のアクセントが一致するのは1語であるが、名詞が文頭に来る場合には11語で一致し、一致率33.3%で13家族の中で一番高い。Kの家族では、形容詞に修飾された場合と文頭の場合には3人のアクセントが一致する語は1語であるのに、名詞単独の場合には9語で一致し、一致率52.9%で13家族の中で一番高い。また、名詞単独の場合と修飾された場合と文頭の場合の平均値に有意差があるかを調べるためにt検定を行なった。その結果は表10の通りで、名詞の環境別の平均値には有意差はない。

表 10. 環境別平均値の t 検定

環境 標準偏差	環境 平均値	名 詞 単 独	形 容 詞 + 名 詞	名 詞 + 助 詞 …。
	環 境		20.4	24.4
名 詞 単 独		13.9	10.8	8.2
形 容 詞 + 名 詞		1.14		
名 詞 + 助 詞 …。		1.35	0.16	

拍数別に見ると、2拍語で一致率の高い家族(D・E・G・I・J・M)もあれば、3拍語で高い家族(B・F・H)もあり、4拍語で高い家族(A・C・K・L)もある。また、2拍語と3拍語と4拍語の平均値に有意差があるかを調べるためにt検定を行なった。その結果は表11の通りで、名詞の拍数別の平均値にも有意差はない。

このように見てくると、桜村出身の父母子3人のアクセントの一致に関しては、名詞の拍数によっても名詞の起こる環境によっても一定の傾向は見られず、各家族で全くまちまちであることが分かる。東京出身の家族の場合には、3拍語や4拍語より2拍語での一致率が高いとか、形容詞に修飾されたり文頭に立つ場合より単独の方が一致率が低いというようなことはどの家族にも見ら

表 11. 拍数別平均値の t 検定

拍数 標準偏差	拍数	2 拍	3 拍	4 拍
	平均値	24.5	23.1	22.5
拍数	標準偏差	8.3	9	8.8
2 拍				
3 拍		0.48		
4 拍		0.72	0.20	

れる傾向である。このことから、どの家族にも共通な一定の傾向がなく各家族で全くまちまちであるというのも無アクセント地域の1つの特徴といえよう。

父母子3人のアクセントが一致している語⁴⁾とその音相および家族数を表12~14に示す。表に記された語は2拍名詞が32語中25、3拍名詞が22語中18、4拍名詞が13語中11である。このことは言いかえると、2拍名詞の7語、3拍名詞の4語、4拍名詞の2語は、13家族の中で父母子3人のアクセントが一致する家族が全くないということである。名詞67語のうち54語は13家族のうちどこかで父母子3人のアクセントが一致しているわけであるが、そのうち16語で2種類の音相、1語で3種類の音相が見られる。たとえば、「雪」はKとMの家族で父母子3人のアクセントが一致しているのだが、K一家は○●、M一家は●○と発音している。3種類の音相が見られるのは「雷が」で、CとFとMの3家族がそれぞれ異なる音相で発音しているのであるが、3つとも東京式アクセントとして認められている型と同じ音相である。この表で興味深いのは、*印のついた音相で発音している家族29に対し、*印のないもの、すなわち東京式アクセントと同じ音相で発音している家族が177と圧倒的に多いということである。

父母子3人のアクセントが13家族のうち7家族以上で一致している語は、「窓」「(厚い)本」「水が」「(重い)荷物」「子供が」「力が」「年寄り」「自動車」の8語であるが、このうち「窓」「子供が」は家族によって音相が異なっている。「水が」は13家族中10家族で3人のアクセントが一致し、しかも10家族全部東京式アクセントと同じ音相(ミズガ)で発音している。「(厚い)本」

4) 名詞に助詞が付いた形も語と呼び、1語に数えている。

表 12. 父母子のアクセントが一致している語 (2拍)

調査語	音相	家族数	音相	家族数	家族数合計
雪	○●	1	*●○	1	2
紙	○●	1			1
海	●○	3			3
窓	●○	6	*○●	1	7
(涼しい) 風	○●	2			2
(おいしい) 水			*●○	1	1
(長い) 棒	○●	1	*●○	4	5
(深い) 川	○●	4			4
(赤い) 花	○●	2	*●○	1	3
(暗い) 部屋	○●	1			1
(明るい) 空	●○	6			6
(細い) 糸	●○	5	*○●	1	6
(厚い) 本	●○	9			9
風が	○●▼	4	*○●▼	1	5
水が	○●▼	10			10
棒が	○●▼	3			
雪が	○●▼	2	*○●▼	2	4
紙を	○●▼	6			6
川が	○●▼	6			6
花が	○●▼	5	*○●▼	1	6
部屋が	○●▼	5			5
空が	●○▼	2			2
糸が	●○▼	1	*○●▼	1	2
本が	●○▼	2			2
窓を			*○●▼	1	1

注 ●▼は高い拍, ○▼は低い拍, ▼▼は動詞を表わす。以下同じ。

* は東京式アクセントと異なる音相であることを表わす。

は9家族「(重い) 荷物」は8家族で3人のアクセントが一致していて、しかも全家族東京式アクセントと同じ音相(厚いホン、重いニモツ)で発音している。ところが、同じ「水」や「荷物」でも形容詞に修飾された「(おいしい) 水」や、文頭の「荷物が」は、3人のアクセントが一致しているのは1家族だけで、しかも東京式アクセントとは異なる音相(ミズ、ニモツガ)で発音している。

表 13. 父母子のアクセントが一致している語 (3拍)

調査語	音相	家族数	音相	家族数	家族数合計
はさみ			*○●○○	2	2
力	○●●	2	*○●○○	3	5
刀	○●○	1			1
頭	○●●	1	○●○	1	2
心	○●○	1			1
(かわいい) 子ども	○●●	2			2
(重い) 荷物	●○○	8			8
(強い) 力	○●●	1	*○●○○	3	4
かばんが	○●●▼	2	*○●●▼	1	3
時間が	○●●▼	3	*○●●▼	1	4
子どもが	○●●▼	7	*○●●▼	1	8
はさみで	○●●▼	3			3
荷物が			*○●●▼	1	1
力が	○●●▼	7			7
刀を	○●●▼	4			4
頭が	○●●▼	4			4
心が	○●●▼	5			5
電車が	○●●▼	2			2

注 * は東京式アクセント異なる音相であることを表わす。

表 14. 父母子のアクセントが一致している語 (4拍)

調査語	音相	家族数	音相	家族数	音相	家族数	家族数合計
図書館	○●○○○	4					4
雷	○●●○○	3					3
年寄り	○●●○○	7					7
自動車	○●○○○	7					7
(短い) 鉛筆			*○●●○○	2			2
(親しい) 友達	○●●●●	1					1
鉛筆が	○●●●▼	6					6
図書館へ	○●○○○▼	2					2
雷が	○●●●▼	1	○●●○○▼	1	○●●●▼	1	3
年寄りに	○●●●▼	1					1
自動車に	○●○○○▼	1	○●●●▼	1			2

注 * は東京式アクセントと異なる音相であることを表わす。

2. 父母子のアクセントの不一致

同一語を父母子3人がそれぞれ異なる音相で発音している語数とその割合

表 15. 父母子のアクセントの不一致

拍数 家族略称	2 拍	3 拍	4 拍	合 計
A	7語(21.9%)	2語(9.1%)	2語(15.4%)	11語(16.4%)
B	8(25.0)	4(18.2)	3(23.1)	15(22.4)
C	7(21.9)	7(31.8)	4(30.8)	18(26.9)
D	0(0)	2(9.1)	2(15.4)	4(6.0)
E	0(0)	4(18.2)	0(0)	4(6.0)
F	4(12.5)	0(0)	1(7.7)	5(7.5)
G	4(12.5)	3(13.6)	3(23.1)	10(14.9)
H	5(15.6)	4(18.2)	1(7.7)	10(14.9)
I	3(9.4)	3(13.6)	4(30.8)	10(14.9)
J	2(6.3)	5(22.7)	2(15.4)	9(13.4)
K	4(12.5)	1(4.5)	0(0)	5(7.5)
L	4(12.5)	3(13.6)	2(15.4)	9(13.4)
M	1(3.1)	1(4.5)	4(30.8)	6(9.0)
平 均	3.8(11.9)	3(13.6)	2.2(16.9)	8.9(13.3)

表 16. 父母子のアクセントの不一致

環境 家族略称	名詞単独	形容詞+名詞	名詞+助詞…。	合 計
A	3語(17.6%)	5語(29.4%)	3語(9.1%)	11語(16.4%)
B	7(41.2)	3(17.6)	5(15.2)	15(22.4)
C	3(17.6)	3(17.6)	12(36.4)	18(26.9)
D	0(0)	1(5.9)	3(9.1)	4(6.0)
E	0(0)	3(17.6)	1(3.0)	4(6.0)
F	4(23.5)	0(0)	1(3.0)	5(7.5)
G	4(23.5)	2(11.8)	4(12.1)	10(14.9)
H	5(29.4)	2(11.8)	3(9.1)	10(14.9)
I	3(17.6)	1(5.9)	6(18.2)	10(14.9)
J	3(17.6)	3(17.6)	3(9.1)	9(13.4)
K	0(0)	1(5.9)	4(12.1)	5(7.5)
L	1(5.9)	3(17.6)	5(15.2)	9(13.4)
M	0(0)	1(5.9)	5(15.2)	6(9.0)
平 均	2.5(14.7)	2.2(12.9)	4.2(12.7)	8.9(13.3)

(不一致率)を名詞の拍数によってまとめたのが表15、名詞の起こる環境によってまとめたのが表16である。図3は不一致率の低い順に並べ、そこに一致率も同時に図示したものである。

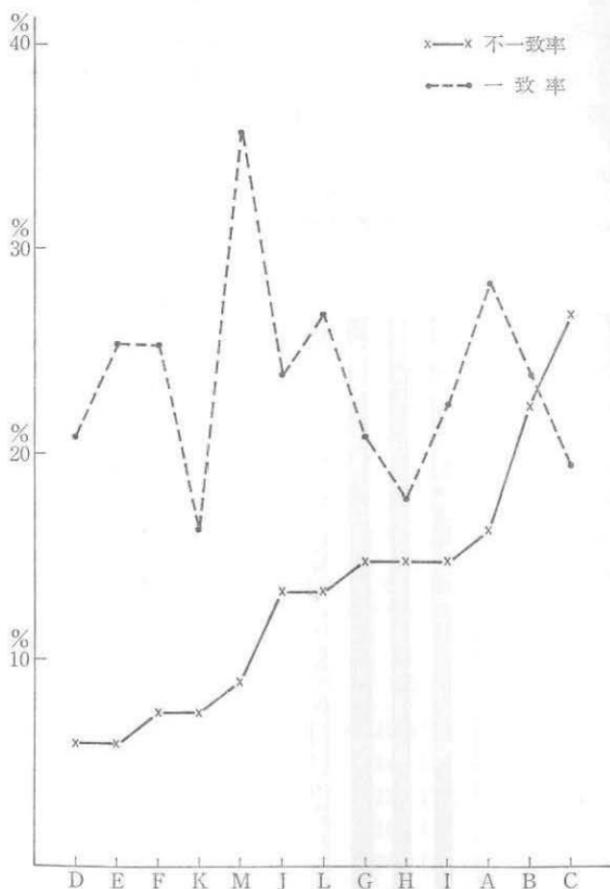


図3 父母子のアクセントの一致率と不一致率

3人のアクセントの不一致率が一番低い家族は、DとEの6.0%である。D一家の場合、名詞67語のうち14語(20.9%)は父母子3人が同じ音相、すなわち1家族で1語に1つの音相があり、4語(6.0%)は3人がそれぞれ異なる音相、すなわち1家族で1語に3つの音相があり、49語(73.1%)は父母子のうち2人が同じで1人が異なる音相、すなわち1家族で1語に2つ音相がある。E一家の場合、67語のうち17語(65.4%)は1語に1つの音相があり、4

語 (6%) は1語につき3つの音相、46語 (68.6%) は1語につき2つの音相がある。D一家の一致率は20.9%で13家族中9位、E一家の一致率は25.4%で4位で、不一致率の低い家族が一致率が高いというわけではない。このことは図3からも明らかである。

一致率と不一致率を図3によって比較すると、13家族のうち12家族は一致率の方が高いが、Cだけは不一致率の方が高い。C一家の不一致率は13家族中で一番高く、調査語の26.9%は1家で1語に3つの音相が見られる。

3. 2人のアクセントの一致

父母、父子、母子の2人間のアクセントについてそれぞれ検討する。図4

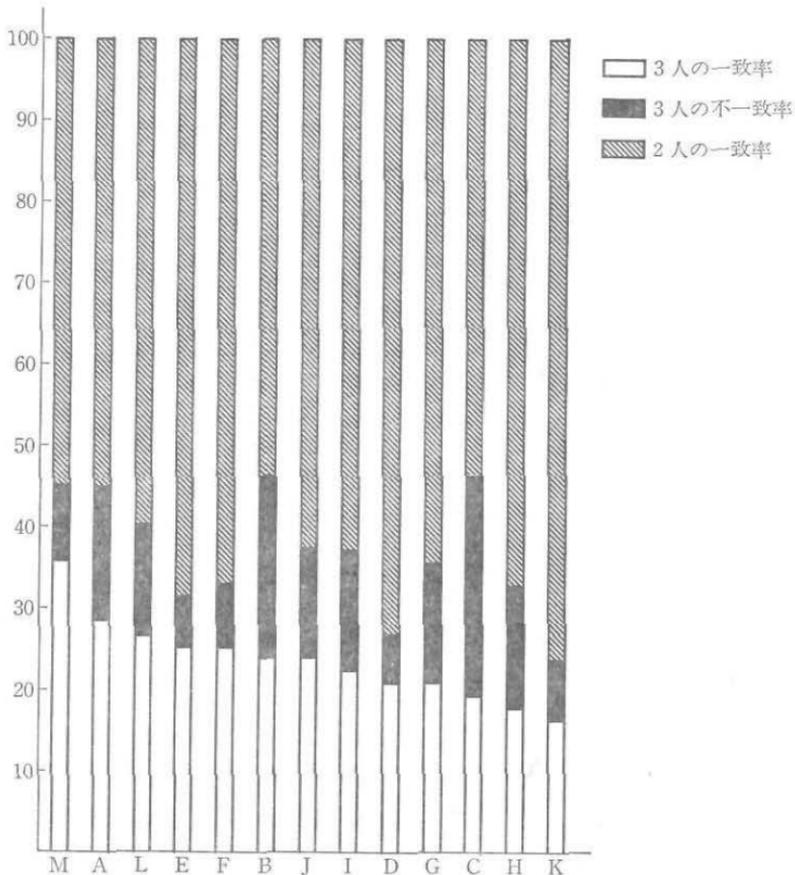


図4 各家族における3人のアクセントの一致率・不一致率と2人の一致率

の斜線部が各家族で父母子3人のうち2人のアクセントが一致している割合である。すなわち、父母の一致と父子の一致と母子の一致をあわせた割合が斜線

表 17. 父母, 父子, 母子のアクセントの一致

	2拍 (32語)			3拍 (22語)		
	父 母	父 子	母 子	父 母	父 子	母 子
A	8語(25.0%)	2語 (6.3%)	6語(18.8%)	8語(36.4%)	5語(22.7%)	1語 (4.5%)
B	10 (31.3)	4 (12.5)	4 (12.5)	1 (4.5)	5 (22.7)	5 (22.7)
C	6 (18.8)	9 (28.1)	4 (12.5)	5 (22.7)	7 (31.8)	2 (9.1)
D	5 (15.6)	7 (21.9)	12 (37.5)	7 (31.8)	3 (13.6)	7 (31.8)
E	9 (28.1)	3 (9.4)	10 (31.3)	6 (27.3)	2 (9.1)	6 (27.3)
F	4 (12.5)	8 (25.0)	11 (34.4)	1 (4.5)	3 (13.6)	9 (40.9)
G	3 (9.4)	11 (34.4)	5 (15.6)	2 (9.1)	8 (36.4)	5 (22.7)
H	4 (12.5)	10 (31.3)	7 (21.9)	3 (13.6)	4 (18.2)	7 (31.8)
I	2 (6.3)	7 (21.9)	12 (37.5)	7 (31.8)	1 (4.5)	6 (27.3)
J	9 (28.1)	4 (12.5)	5 (15.6)	10 (45.5)	4 (18.2)	1 (4.5)
K	9 (28.1)	10 (31.3)	6 (18.8)	2 (9.1)	7 (31.8)	8 (36.4)
L	7 (21.9)	5 (15.6)	7 (21.9)	7 (31.8)	4 (18.2)	2 (9.1)
M	9 (28.1)	5 (15.6)	5 (15.6)	6 (27.3)	3 (13.6)	4 (18.2)
平 均	6.5(20.3)	6.5(20.3)	7.2(22.5)	5 (22.7)	4.3(19.5)	4.8(21.8)
	4拍 (13語)			合 計 (67語)		
	父 母	父 子	母 子	父 母	父 子	母 子
A	3語(23.1%)	1語 (7.7%)	2語(15.4%)	19語(28.4%)	8語(11.9%)	9語(13.4%)
B	3 (23.1)	4 (30.8)	1 (7.7)	14 (20.9)	13 (19.4)	10 (14.9)
C	1 (7.7)	0 (0)	3 (23.1)	12 (17.9)	16 (23.9)	9 (13.4)
D	1 (7.7)	6 (46.2)	1 (7.7)	13 (19.4)	16 (23.9)	20 (29.9)
E	5 (38.5)	3 (23.1)	2 (15.4)	20 (29.9)	8 (11.9)	18 (26.9)
F	1 (7.7)	3 (23.1)	5 (38.5)	6 (9.0)	14 (20.9)	25 (37.3)
G	1 (7.7)	5 (38.5)	2 (15.4)	6 (9.0)	24 (35.8)	12 (17.9)
H	1 (7.7)	4 (30.8)	5 (38.5)	8 (11.9)	18 (26.9)	19 (28.4)
I	3 (23.1)	1 (7.7)	3 (23.1)	12 (17.9)	9 (13.4)	21 (31.3)
J	7 (53.8)	2 (15.4)	1 (7.7)	26 (38.8)	10 (14.9)	7 (10.4)
K	3 (23.1)	3 (23.1)	3 (23.1)	14 (20.9)	20 (29.9)	17 (25.4)
L	2 (15.4)	4 (30.8)	1 (7.7)	16 (23.9)	13 (19.4)	10 (14.9)
M	2 (15.4)	1 (7.7)	3 (23.1)	17 (25.4)	9 (13.4)	12 (17.9)
平 均	2.5(19.2)	2.8(21.5)	2.5(19.2)	14.1(21.0)	13.7(20.4)	14.5(21.6)

部である。それでは、父母、父子、母子のそれぞれは、どれ位一致しているであろうか。それを名詞の拍数によってまとめたのが表17である。各家族における2人の一致率の平均を比較すると、JやAのように父母の一致率が比較的高くて父子・母子の一致率が低い家族もあれば、FやGのように父母の一致率が低くて母子(F)あるいは父子(G)の一致率の高い家族もあり、BやKやLのように父母と父子と母子の一致率に大差のない家族もありで、家族によって全くまちまちである。また、t検定を行なった結果、父母と父子と母子の平均値に有意差は見られなかった。これらのことから、同世代である父と母は一致率が高いとか、子供の言語習得には父より母の影響の方が大きいなどというような傾向はこの地域のアクセントにおいては見られないといえよう。

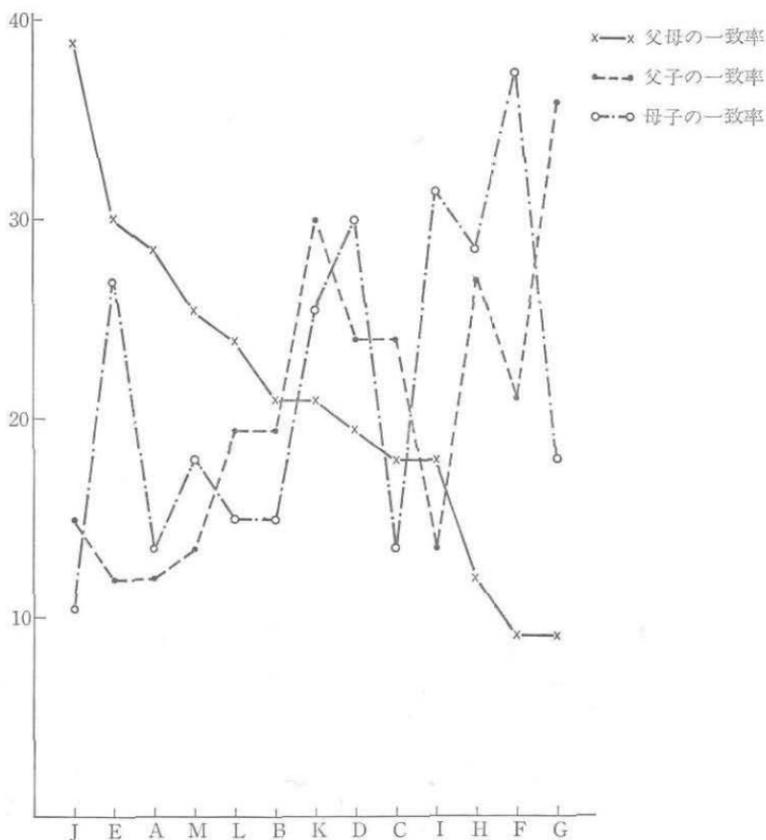


図5 父母、父子、母子のアクセントの一致率

図5は父母の一致率の高い順に並べ、同時に父子と母子の一致率を図示したものである。父母の一致率が高ければ、子供は家庭内で同じアクセントを耳にすることが多いわけであるから、子と父または子と母の一致率も高いのではないかと予想されるが、図5からはそのような傾向は全く見られない。

IV. 名詞のアクセントの実態

前章では1家族を単位として、同一家族内の父母子3人について、あるいは父母・父子・母子の2人についてそれぞれアクセントがどれ程度同じであるか異なっているかについて述べたが、本章では父13人・母13人・中学生13人をそれぞれ単位としてアクセントの実態を観察し、世代によるアクセントの異同について述べる。

1. 2拍名詞

表18は中学生13人・父親13人・母親13人のアクセントを「風」「水」「棒」についてまとめたものである。これらの語は東京式アクセントでは平板型である。

表18. 2拍名詞のアクセントの実態 (1)

調査語	東京式アクセント	名詞単独			形容詞+名詞			名詞+助詞…				
		インフォーマントのアクセント	中学生	父 母	インフォーマントのアクセント	中学生	父 母	インフォーマントのアクセント	中学生	父 母		
風	○●	○●	%	%	○●	%	%	○●▼	%	%	%	
		●○	84.6	30.8	23.1	100	30.8	46.1	○●▼	80.8	38.5	57.7
		●●	7.7	46.1	46.1	●○	53.8	38.5	○●▼	15.4	57.7	34.6
		●●	7.7		30.8	●●	15.4	15.4	●○▼	3.8	3.8	
水	○●(▼)				○●	76.9	15.4	23.1	○●▼	88.5	46.2	65.4
					●○	23.1	65.4	50.0	○●▼	11.5	53.8	34.6
					●●		19.2	26.9				
棒	○●				○●	61.5	15.4	15.4	○●▼	76.9	53.8	53.8
					●○	30.8	76.9	84.6	○●▼	7.7	23.1	30.8
					●●	7.7			●●▼	15.4	23.1	7.7
					○○		7.7		●●▼			7.7

音相が1種のものは中学生の発音で形容詞に修飾された「風」だけである。それ以外の項目では、中学生と父親は2~3種、母親は2~4種の音相が見られる。しかし、その割合を見ると、中学生は平板型の使用率が高いのに対して、両親は特に優勢な型は見られない。

表19は中学生13人・父親13人・母親13人のアクセントを「雪」「紙」「川」「花」「部屋」についてまとめたものである。これらの語は東京式アクセントでは尾高型に発音される。

中学生の発音では、名詞単独の「雪」「紙」「花」と形容詞に修飾された「(深

表 19. 2 拍名詞のアクセントの実態 (2)

調査語	東京式アクセント	名詞単独			形容詞+名詞			名詞+助詞…。					
		インフォーマントのアクセント	中学生	父	母	インフォーマントのアクセント	中学生	父	母	インフォーマントのアクセント	中学生	父	母
雪	○●		% 84.6	% 30.8	% 30.8				○●▽	% 61.6	% 53.8	% 61.6	
	●○		15.4	53.8	46.1				○●▽	38.4	46.2	38.4	
	●●			7.7	15.4								
	○●			7.7	7.7								
紙	○●		92.3	23.1	30.8				○●▽	76.9	69.2	92.3	
	●○		7.7	53.8	38.4				○●▽	23.1	30.8		
	●●			7.7	23.1				●●▽			7.7	
	○●			15.4									
	●●				7.7								
川	○●(▽)					○●	% 92.3	% 46.2	% 53.8	○●▽	76.9	76.9	61.5
						●○	7.7	46.2	46.2	○●▽	23.1	15.4	23.1
						●●		7.6		●●▽		7.7	15.4
花	○●		92.3	30.8	15.4	○●	92.3	38.4	38.4	○●▽	61.6	65.4	61.6
	●○		7.7	46.2	61.5	●○	7.7	46.2	53.9	○●▽	38.4	34.6	38.4
	●●			15.4	23.1	●●		15.4	7.7				
	○●			7.6									
部 屋						○●	92.3	30.8	46.2	○●▽	92.3	69.2	53.8
						●○	7.7	61.5	38.4	○●▽	7.7	23.1	23.1
						●●		7.7	7.7	●●▽		7.7	15.4
						○○			7.7	●○▽			7.7

い) 川]「(赤い) 花]「(暗い) 部屋]、すなわち名詞で切れる場合、○●と●○の2種が見られるが、いずれの場合も○●が84%以上で圧倒的に優勢である。これらの名詞が文頭に来て助詞が後続すると●○はなくなり、○●▽と○●▽の対立が見られるようになる。この場合も○●▽の方が優勢ではあるが、ユキガ (38.4%)、カミラ (23.1%)、カワガ (23.1%)、ハナ(花)ガ (38.4%)などはかなり使われている。

両親の発音では、名詞で切れる場合はほとんど3~4種の音相が見られる。母親の「(深い) 川」の発音だけが○●と●○の2種である。3~4種のうち○●と●○が他より高い割合で使われていて、他の●●、○●、●●、○○などの使用率は低い。○●と●○では、母親の「(深い) 川」と「(暗い) 部屋」以外は●○の方が多く使われていて、中学生の場合とは逆である。名詞が文頭に

表 20. 2拍名詞のアクセントの実態 (3)

調査語	東京式 アクセント	名詞単独				形容詞+名詞				名詞+助詞…			
		インフ ォーマン トのアク セント	中学生	父	母	インフ ォーマン トのアク セント	中学生	父	母	インフ ォーマン トのアク セント	中学生	父	母
空						●○	% 92.3	% 84.6	% 61.5	●○▽	% 84.6	% 23.1	% 53.8
						○●	7.7	15.4	15.4	○●▽	7.7	61.5	30.8
						●●			23.1	○●▽	7.7	15.4	15.4
糸						●○	61.5	69.2	69.2	●○▽	76.9	23.1	23.1
						○●	38.5	30.8	30.8	○●▽		53.8	53.8
										○●▽	23.1	23.1	23.1
海	●○(▽)	●○	% 46.2	% 76.9	% 61.5					●○▽	61.5	23.1	23.1
		○●	46.2	15.4	23.1					○●▽	23.1	30.8	61.5
		●●	7.6	7.7	15.4					○●▽	15.4	46.1	15.4
窓		●○	76.9	53.8	84.6					●○▽	61.5		23.1
		○●	15.4	38.5	7.7					○●▽	30.8	53.8	46.1
		●●	7.7	7.7	7.7					○●▽	7.7	46.2	30.8
本		●○	84.6	100	84.6					●○▽	84.6	46.2	61.5
		○●	15.4		7.7					○●▽		30.7	7.7
		○○			7.7					○●▽	7.7	15.4	7.7
									●●▽	7.7	7.7	23.1	

来て助詞が後続すると音相は2~3種に減る。中学生の場合同様、○●▽と○●▽の2種の対立が見られ、○●▽の方が優勢である。中学生の発音には見られないもので●●▽と●○▽があるが、使用率は低い。

表20は中学生13人・父親13人・母親13人のアクセントを「空」「糸」「海」「窓」「本」についてまとめたものである。これらの語は東京式アクセントでは頭高型に発音される。

中学生の発音では、名詞で切れる場合すべての語に●○と○●があり、「海」と「窓」には●●も見られる。「海」は●○と○●が同じ割合で使われているが、それ以外の語は●○が優勢である。これらの名詞が文頭に来て助詞が後続すると、「糸が」に2種、その他には3種の音相が見られるが、ここでも優勢なのは●○▽である。「海」は単独の場合も助詞が後続する場合も、他の語に比べ頭高型の使用率が低い。

両親の発音について見ると、「本」は名詞で切れる場合、父親は100%、母親は84.6%が●○であるが、助詞が付くと4種の音相が見られる。4種の中で一番使用率が高いのは●○▽であるが、単独の場合の●○の使用率に比べると低い。「空」「糸」「海」「窓」も名詞で切れる場合2~3種の音相が見られるが、●○の使用率が50%以上で他より高い。これらの名詞が文頭に来て助詞が後続すると、父親の場合は●○▽より○●▽の使用率の方が高くなり、「海で」「窓を」では○●▽も多く使われている。母の場合も●○▽より○●▽の使用率の方が高いが、「空が」では●○▽の方が高い。

2拍名詞について中学生と両親の発音を比較すると、次のようなことがいえる。

- ① 両親より中学生の方が音相の種類が少ない。
- ② 使用率が70%以上で優勢な型と認められる音相が中学生は21語にあるのに対して、父親は5語、母親は4語で、その他の語では2つ以上の音相が同じように使用され、特に優勢な型と認められる音相がない。
- ③ 中学生の発音で優勢と認められる型は東京式アクセントと同じ型である。

2. 3拍名詞

表21は中学生13人・父親13人・母親13人のアクセントを「かばん」「時間」「子供」「はさみ」「荷物」についてまとめたものである。これらの語の東京式アクセントは、「かばん」「時間」「子供」が平板型、「はさみ」が尾高型、「荷物」が頭高型である。

表 21. 3拍名詞のアクセントの実態 (1)

調査語	東京式 アクセント	名詞単独			形容詞+名詞			名詞+助詞---				
		インフ ォーマ ントの アクセ ント	中学 生	父	母	インフ ォーマ ントの アクセ ント	中学 生	父	母	インフ ォーマ ントの アクセ ント	中学 生	父
か ば ん					○●●	% 76.9	% 15.4	% 38.4	○●●▼	% 84.6	% 46.2	% 53.8
					●○○	23.1	38.4	23.1	○●●▽	15.4	53.8	23.1
					○○○		30.8	30.8	○●○▽			15.4
					●●○		15.4	7.7	●●●▽			7.7
時 間 子 供	○●●(▼)				○●●	92.3	15.4	53.8	○●●▼	84.6	61.5	38.5
					●○○	7.7	46.2	23.1	○●●▽	15.4	38.5	53.8
					○○○		38.4	23.1	○●○▽			7.7
は さ み	○●●(▽)		% 69.2	% 15.4	% 7.7				○●●▽	46.2	69.2	30.8
			○●○	30.8	84.6	69.2			○●○▽	46.2		38.4
			●●○			23.1			○●●▼	7.6	30.8	30.8
荷 物	●○○(▽)				●○○	84.6	84.6	84.6	●○○▽	69.2	7.7	30.8
					○○○	15.4	7.7	15.4	○●○▽	23.1	69.2	38.4
					○●●				○●●▼	7.7	15.4	23.1
					●●○		7.7		○●●▽		7.7	7.7

「かばん」「時間」「子供」の中学生の発音では2種の音相が見られるが、いずれの場合も平板型が75%以上で優勢である。これらの語の両親の発音では比較的優勢なのは「子供が」の○●●▼だけで、その他の項目では2~4種の音相が見られ、実にさまざまに発音されている。

中学生の「はさみ」には○●●と○●○が見られ○●●が69.2%で優勢であるが、文頭に来て「はさみで」になると○●●▽は46.2%に下がり、○●○▽は単独で30.8%であったのが46.2%に上がる。「はさみ」には最近の東京でもこの2つの型が見られる⁵⁾。ただし、中学生の発音に見られる○●●▼

5) 稲垣滋子・堀口純子「東京語におけるアクセントのゆれ—地域差・意識と実態」
「ことばの諸相」文化評論出版、昭和54年、p.67。

は東京では見られない。両親の「はさみ」は、単独の場合は○●○が優勢で、文頭に来て助詞が付くと父親は○●●▽が優勢になるが、母親は3つの音相を大差なく使っている。

「荷物」については中学生の発音では、名詞で切れる場合は●○○が84.6%で、文頭に来て助詞が後続すると●○○▽が69.2%で、どちらの場合も頭高型が優勢である。両親の発音でも名詞で切れる場合は●○○が84.6%で優勢であるが、助詞が付くと音相は4種になり●○○▽の使用率が下がり○●○▽の使用率が上がる。

表22は中学生13人・父親13人・母親13人のアクセントを「力」「刀」「頭」「心」「電車」についてまとめたものである。これらの語の東京式アクセントは『明解日本語アクセント辞典』（以下『明解』と略す）、『全国アクセント辞典』（以下『全国』と略す）、『日本語発音アクセント辞典』（以下『NHK』と略す）のいずれかに2種の型が記されている。

「力」の東京式アクセントは尾高型であるが、『明解』には平板型も記述されている。「力」が名詞で切れる場合、○●●と○●○の両方が見られるが、中学生は○●●がやや優勢で、両親は○●○がやや優勢である。「力」が文頭に来て助詞が後続すると、中学生に2種、父親に4種、母親に3種の音相が見られるが、優勢なのは中学生も両親も○●●▽である。

「刀」「頭」の東京式アクセントは尾高型であるが、中高型も「刀」については『明解』と『全国』に、「頭」については『明解』に記されている。「刀」は単独の場合、中学生は○●●、父親は○●○の使用率が高い。母親は4種の音相が見られるが、その中で○●○の使用率がやや高い。「刀」が文頭に来て助詞が後続すると、中学生は○●●▽が92.3%で圧倒的に優勢である。両親は3種の音相が見られ、その中で使用率が高いのは○●●▽であるが（父親53.8%、母親46.1%）、中学生のこの音相の使用率に比べると低い。

「頭」は単独の場合○●●と○●○が見られるが、優勢なのは中学生は○●●、両親は○●○である。「頭」が文頭に来て助詞が後続すると音相が3種になるが、中学生も両親も○●●▽を比較的多く使用している。「刀」「頭」が文頭に来て助詞が後続する場合に○●●▽の使用が中学生にも両親にも見られ、特に両親は30%以上の使用率を示している。

「心」の東京式アクセントは中高型であるが、『明解』では尾高型も認めている。中学生の「心」の発音には、名詞単独の場合も助詞が付いた場合も2種の音相が見られるが、使用率が高いのは○●●(76.9%)、○●●▽(84.6%)で

表 22. 3 拍名詞のアクセントの実態 (2)

調査語	辞典による東京式アクセント			名詞単独				形容詞+名詞				名詞+助詞…。			
	明解	全	NHK	インフォマントのアクセント	中学生	父	母	インフォマントのアクセント	中学生	父	母	インフォマントのアクセント	中学生	父	母
力	○●●(▽)			○●● ○●○	69.2% 30.8	30.8% 69.2	46.2% 53.8	○●● ○●○ ●○○	76.9% 23.1	23.1% 69.2	30.8% 69.2	○●●▽ ○●○▽ ○●○▽ ○●○▽ ○●○▽	80.8% 19.2	57.7% 30.8	65.4% 30.8 3.8
	○●●(▼)									7.7			7.7 3.8		
刀	○●●(▽)			○●● ○●○ ●○○ ●●○	61.5 30.8 7.7	23.1 76.9	30.8 46.1 15.4 7.7					○●●▽ ○●○▽ ○●●▼	92.3 7.7	53.8 15.4 30.8	46.1 23.1 30.8
				○●○(▽)			○●● ○●○	84.6 15.4	38.5 61.5	38.5 61.5				○●●▽ ○●○▽ ○●●▼ ○●○▽	84.6 7.7 7.7
心	○●○(▽)			○●○ ○●● ○●○ ●●○	23.1 76.9	76.9 23.1	69.2 15.4 7.7 7.7					○●○▽ ○●●▽ ○●●▼	15.4 84.6	7.7 69.2 23.1	61.5 38.5
	○●○(▼)														
電車	●○○(▽)			○●● ●○○ ○●○ ○●○ ●○○ ●●○	92.3 7.7	15.4 61.5 15.4	15.4 76.9 7.7					○●●▼ ●○○▽ ○●●▽ ○●○▽	53.8 23.1 23.1	46.2 23.1 23.1 7.6	38.5 46.1
	○●●(▼)					7.7	7.7								15.4

ある。両親の発音には2~4種の音相が見られるが、名詞単独の場合は○●○(父76.9%、母69.2%)、助詞が付いた場合は○●●▽(父69.2%、母61.5%)の使用率が比較的高い。「刀」「頭」と同様に「心」も文頭の場合、両親の発音には○●●▽が見られる。

「電車」の東京式アクセントは、どの辞典にも頭高型と平板型の2種が記されている。中学生の発音について見ると、名詞単独の場合は○●●が92.3%と圧倒的に優勢であるが、名詞が文頭に来て助詞が付くと、3種の音相が見られ、比較的使用率が高いのは○●●▽の53.8%である。父親の発音には4種の音相が見られるが、名詞単独の場合は●○○(61.5%)が、助詞が付いた場合は○●●▽(46.2%)が比較的使用率が高い。母親の発音には3種の音相があり、名詞単独の場合は●○○(76.9%)がかなり多く使われているが、助詞が付いた場合は●○○▽(46.1%)と○●●▲(38.5%)が大差なく使われている。

3拍名詞について中学生と両親の発音を比較すると、2拍名詞の場合と同じようなことがいえる。

- ① 両親より中学生の方が音相の種類が少ない。
- ② 使用率が70%以上で優勢な型と認められる音相が中学生の発音では15語にあるのに対して、父親は4語、母親は2語で、その他の語では2つ以上の音相が同じように使用され、特に優勢な型と認められる音相がない。
- ③ 中学生の発音で優勢と認められる型は東京式アクセントと同じ型である。

3. 4拍名詞

表23は中学生13人・父親13人・母親13人のアクセントを「鉛筆」「友達」「図書館」についてまとめたものである。これらの語の東京式アクセントは、「鉛筆」と「友達」が平板型で、「図書館」は中高型(○●○○)である。

「鉛筆」について見ると、中学生は名詞で切れる場合○●●●が69.2%で、名詞が文頭に来て助詞が付くと○●●●▽が92.3%になる。両親は4~5種の音相がありさまざまだが、名詞で切れる形では○●●○(父76.9%、母46.1%)、文頭に来て助詞が付いた場合は○●●●▽(父53.8%、母46.1%)が比較的使用率が高い。

「友達」は形容詞に修飾された名詞で切れる形(「親しい友達」)しか調査していない。中学生と母親には3種の音相が見られるが、比較的多く使われているのは○●●●(中学生61.5%、母53.8%)である。父親の発音はさまざまで、5種の音相が見られる。

「図書館」の名詞単独の形の中学生の発音は○●○○が100%である。父親は4種、母親は3種の音相が見られるが、○●○○が61.5%で比較的使用率が高い。名詞が文頭に来て助詞が付くと、中学生には3種の音相が見られるが優勢なのは単独の場合と同様○●○○▽ (84.6%) である。両親は4種の音相が見られ、単独の場合に使用率が61.5%であった○●○○が下がり、父親は○●●●▽が53.8%で、母親は○●○○▽と○●●●▽を同じ割合で使っている。

表24は中学生13人・父親13人・母親13人のアクセントを「雷」「年寄り」「自動車」「音楽」についてまとめたものである。これらの語の東京式アクセントは辞典に2種以上の型が記されている。

「雷」と「年寄り」は東京式アクセントでは尾高型と中高型(○●●○)が認められ、『NHK』には平板型も記されている。「雷」の単独の形では、中学生と父親に3種、母親に5種の音相が見られるが、○●●○(中学生69.2%、父76.9%、母46.1%)が比較的使用率が高い。名詞が文頭に来て助詞が付いた場合、中学生と父親は3種、母親は4種の音相が見られるが、中学生と父親の3種と母親の4種のうちの3種は辞典に記されている東京式アクセントと同じ音相である。中学生はこれらを大差なく使っているが、両親は○●●●▽が53.8%である。

「年寄り」の単独の形では、中学生も父親も母親も3種の音相が見られるが、多く使われているのは○●●○(中学生76.9%、父84.6%、母61.5%)である。文頭に来て助詞が付くと、中学生は単独の場合同様○●●○▽が多いが、父親は3種、母親は4種の音相を大差なく使用している。

「自動車」の東京式アクセントは中高型(○●○○)だが、『NHK』には平板型も記されている。この語だけは両親より中学生の方が音相の種類が多く、名詞単独で3種、助詞が付くと4種見られる。名詞単独の場合○●○○(中学生61.5%、父92.3%、母100%)が優勢で、特に母親は全員これで発音している。文頭に来て助詞が付くと、両親は辞典で東京式アクセントと認められている2種の型と同じ音相を主に使用しているが、中学生はこの2種とそのほかに東京式アクセントとは違う2種の音相との4種を大差なく使用している。

「音楽」の東京式アクセントは頭高型と平板型が記されている。中学生には3種の音相が見られるが、比較的使用率が高いのは●○○○(61.5%)と●○○○▽(46.1%)である。父親は4種、母親は5種の音相がありさまざまな発音が見られるが、名詞単独の場合は○●○○(父61.5%、母53.8%)が比較

表 24. 4 拍名詞のアクセントの実態 (2)

調査語	辞典による東京式アクセント			名詞単独			形容詞+名詞				名詞+助詞…。				
	明解	全	NHK	インフォマントのアクセント	中学生	父	母	インフォマントのアクセント	中学生	父	母	インフォマントのアクセント	中学生	父	母
雷				○●●●●	23.1%	15.4%	23.1%					○●●●●▽	38.5%	15.4%	15.4%
	○●●●●(▽)			○●●●●	69.2	76.9	46.1					○●●●○▽	38.5	30.8	23.1
	○●●●○(▽)			○●●●○	7.7	7.7	7.7					○●●●●▽	23.0	53.8	53.8
				●●●●●			7.7					●●●●○▽			7.7
			○●●●●(▼)	●●●●○			15.4								
年寄り				○●●●●	15.4		23.1					○●●●●▽	23.1	30.7	23.1
	○●●●●(▽)			○●●●●	76.9	84.6	61.5					○●●●○▽	61.5	30.7	38.5
	○●●●○(▽)			○●●●○	7.7							○●●●●▽	15.4	38.6	30.8
				○●●●●		7.7						●●●●●▽			7.7
			○●●●●(▼)	●●●●○		7.7	15.4								
自動車				○●●●○	61.5	92.3	100					○●●●○▽	38.5	38.5	61.5
	○●●●○(▽)			○●●●●	30.8	7.7						○●●●●▽	15.4	46.1	30.8
				○●●●○	7.7							○●●●●▽	23.1	15.4	7.7
			○●●●●(▼)	○●●●○								○●●●○▽	23.1		
音楽				●●●●○	61.5		30.8					●●●●○▽	46.1		7.7
	●●●●○(▽)			○●●●●	23.1	15.4	7.7					○●●●●▽	23.1	23.1	30.8
	○●●●●(▼)			○●●●○	15.4	61.5	53.8					○●●●○▽	30.8	30.8	23.1
				○●●●○		15.4	7.7					○●●●○▽		30.8	30.8
				●●●●○		7.7						○●●●●▽		15.4	7.7

的多い。文頭に来て助詞が付くと、4～5種の音相が大差なく使用されている。

4拍名詞について中学生と両親の発音を比較すると、次のようなことがいえる。

- ① 両親より中学生の方が音相の種類が少ないが、「自動車」の場合だけは逆に両親の方が少ない。
- ② 使用率が70%以上で優勢な型と認められる音相で発音している語は、中学生と父親が4語で母親が1語と少ない。その他の語では2つ以上の音相が同じように使用され、特に優勢な型と認められる音相がない。
- ③ 上記の優勢な型と認められる音相は東京式アクセントと同じであるが、父親の「鉛筆」の優勢な型だけはエンピツで東京式アクセントとは違っている。

4. 東京式アクセントの使用率

名詞67語について中学生13人・父親13人・母親13人の実際の発音を調べた結果、東京式アクセントと同じ音相もかなり見られることが分かった。そこで、それがどれ位の割合で使われているかを拍数別にまとめたのが表25、名詞の起こる環境によってまとめたのが表26である。これらの表では東京語でアクセントがゆれている語は除いて計算してある。

表 25. 東京式アクセントの使用率

拍数	中学生	父 親	母 親
2 拍	79.1%	45.2%	49.2%
3 拍	79.2	41.5	43.8
4 拍	81.5	32.3	43.1
平 均	79.9	39.7	45.4

表 26. 東京式アクセントの使用率

環 境	中学生	父 親	母 親
名 詞 単 独	81.2%	47.0%	44.4%
形容詞+名詞	81.9	35.7	45.0
名詞+助詞…。	76.9	46.0	50.0

中学生と父親と母親を比較すると、東京式アクセントと同じ音相の使用率は、中学生の方が両親よりかなり高く、母親の方が父親よりわずかに高い。これらの表にあらわれた数値は予想よりかなり高いものであった。しかし、インフォーマントが東京式アクセントと同じ音相で発音したからといって、彼がその型を持っているとは限らない。たまたまそのように発音した可能性もある。現に、同時に行なった意識調査では何度発音しても自分の音相を内省して知覚することができない例が多数見られた。特に両親の場合、言語形成期にはテレビの影響も東京の人との交流もほとんどなかったはずであり、言語形成期を過ぎてからアクセントを変えるということは大変困難なことであるから、たまたまこのように発音したものと考えられる。それにしても、中学生の79.9%は驚くべき高率である。中学生の場合、両親との差の大きさ、言語形成期のテレビやラジオの影響、東京から学園都市へ移住して来た人々との交流などを考えあわせると、79.9%のうちの少なくとも半分位は自分のアクセントとして一定の型を持っていると考えてよいだろう。

5. 音相の数

名詞 67 語について中学生 13 人・父親 13 人・母親 13 人の実際の発音を調べた結果、同一グループの 13 人が同じ発音をしている語は大変少なく、同一語がいろいろな音相で発音されていることが分かった。そこで、中学生と父親と母親の各グループで 1 語にいくつの音相があるかを調べ表 27 にまとめた。また、1 語あたりの音相数の平均は表 28 の通りである。

表 27. 音相の数と語数

音相の数	語数		
	中学生	父	母
1	2 語	1 語	1 語
2	37	19	15
3	27	30	31
4	1	16	17
5		1	3

1 語につき音相が 1 種の語、すなわち 13 人が同じ音相で発音しているのは、中学生が「(涼しい) 風」「図書館」の 2 語、父が「本」の 1 語、母が「自動車」の 1 語である。調査語 67 語のうち中学生の 65 語、両親の 66 語はそれぞれ 2

表 28. 音相の数の平均

拍 数	型 の 数 の 平 均		
	中 学 生	父	母
2 拍	2.3	2.8	2.9
3 拍	2.2	2.9	3.0
4 拍	2.8	3.9	3.7
平 均	2.4	3.0	3.1

つ以上の音相で発音されているわけである。

同一語が5種類の音相で発音されている語は中学生にはないが、父親には1語、母親には3語ある。同一語が4種類の音相で発音されている語は中学生には1語しかないが、父親には16語、母親には17語もある。言いかえると、両親の方が中学生より1語についての音相の種類が多いということである。このことは表27の1語あたりの音相数の平均からも明らかである。すなわち名詞1語につき中学生は平均2.4種類、父親は3種類、母親は3.1種類の音相があるということである。これは東京出身者の1.2⁶⁾に比べると、桜村出身者のアクセントには一定の型がないということのあらわれといえよう。ただ、両親と中学生を比較すると、音相の数が多く型が一定しないという無アクセントの姿をよりよく見せているのは両親である。

V. ま と め

茨城県新治郡桜村において、父と子は桜村出身で、母も桜村あるいは桜村の隣接地の出身である13家族39人に実施したアクセント調査をもとに、無アクセント地域における中学生と両親のアクセントについてまとめると、次のようなことがいえる。

- ① 1家族ごとに親子3人のアクセントを比較すると、同一語を3人が同じように発音している語が大変少ない。
- ② 平均すると調査語の76%は同一家族内で同一語を2種以上の音相で発音している。
- ③ 親子3人の音相が一致しやすい語や一致しにくい語があるかどうかを見る

⁶⁾ 堀口純子「筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント」『文藝言語研究 言語篇』5, 昭和55年, p.90.

ために、拍数別および名詞の起こる環境別に調べてみたが、13家族に共通な一定の傾向は見られず、各家族で全くまちまちである。

- ④ 父と母のアクセントを家族ごとに調べたが、同世代である父と母が同じアクセントで発音するというような傾向は見られなかった。
- ⑤ 言語形成期にある子供は母のアクセントの影響を受けやすいというような傾向は見られなかった。
- ⑥ 父と母のアクセントが同じである語については子のアクセントもそれと同じになりやすいというような傾向も見られなかった。
- ⑦ 親子3人の音相が一致している場合の型は東京式アクセントと同じであるものが多い。
- ⑧ 中学生は両親の倍近く東京式アクセントと同じ音相を使用している。両親はたまたま発音したのが東京式アクセントと同じであったというだけかもしれないが、中学生の方は言語形成期にテレビ、ラジオの影響や東京からの移住者との交流などで東京式アクセントを耳にする機会が多いことから、ある程度有型化している可能性が考えられる。
- ⑨ 実際に発音した音相を調べてみると、父母の方が中学生より1語あたりの音相の種類が多く、同一語に26人の父と母のいろいろな発音が見られる。それに対して中学生13人の発音には使用率の高い優勢なアクセントの見られる語が多い。

以上の結果から、言語形成地も両親も無アクセントである場合、子供は両親のアクセントの影響を受けることは少なく、同世代の中で優勢なアクセントがある程度あり、そこにテレビ・ラジオ・有型アクセントを持った人との交流というような外的条件が加わると、かなりその影響を受けると考えられる。ただ、中学生13人の名詞の発音の80%が東京式アクセントと同じ音相であるにもかかわらず、彼らの発話が東京語の話者の発話とずいぶん違う印象を与えるということは、イントネーションのかかわりが大きいのではないかと予想される。

この調査の実施にあたって、調査の便宜をはかってくださった桜村立桜中学校の小松崎光男校長、原孝吉先生、また、調査に協力してくださった桜中学校のみなさんと御両親に心から感謝いたします。

この調査研究は、昭和55年度の文部省科学研究費（課題番号571131）の補助を受けて行われた。

参 考 文 献

- 秋永一枝・佐藤亮一・金井英雄「利根川上・中流域のアクセント」『利根川—自然・文化・社会—』弘文堂、昭和46年
- 稲垣滋子・堀口純子「東京語におけるとアクセントのゆれ—地域差・意識と実態—」『ことばの諸相』文化評論出版、昭和54年
- 上野善道「アクセントの個人差をめぐる研究概観」『言語生活』320、昭和53年
- 木野田れい子「埼玉県南埼玉郡久喜町のアクセント—曖昧アクセントから東京アクセントへ—」『都大論究』10、昭和47年
- 金田一春彦監修『明解日本語アクセント辞典』三省堂、昭和43年
- 金田一春彦「アクセントの分布と変遷」『日本語11 方言』岩波書店、昭和52年
- 佐藤亮一「曖昧アクセント地域における話者の型意識について—「比較発音による調査」から—」『ことばの研究』4、秀英出版、昭和49年
- 佐藤亮一「アクセントの「ゆれ」をめぐる—曖昧アクセント地域を中心に—」『青山語文』4、昭和49年
- 徳川宗賢編『論集日本語研究2 アクセント』有精堂、昭和55年
- 日本放送協会編『日本語発音アクセント辞典』、昭和53年
- 平山輝男編『全国アクセント辞典』東京堂出版、昭和49年
- 平山輝男「移住者二世の言語—特に無アクセント地域の場合—」『国語学』114、昭和53年
- 堀口純子「筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント」『文藝言語研究言語篇』5、昭和55年
- 馬瀬良雄「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125、昭和56年